

Learning from Monastery

修道院から考える

西洋建築史系スタジオ課題

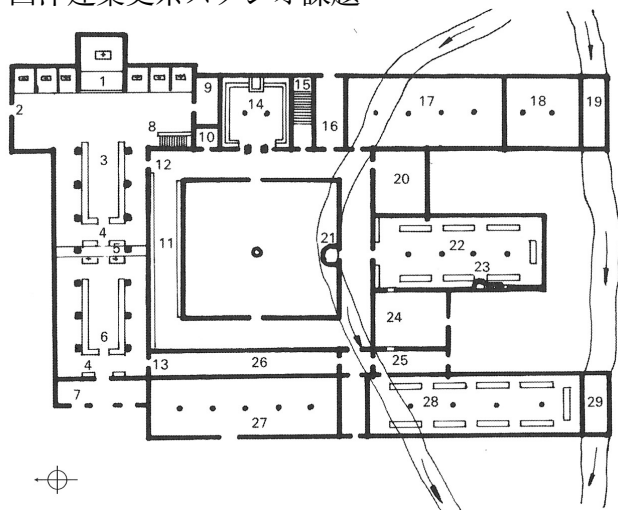


図6 シトー会修道院の理想的平面図（オーベール、ディミエによる）

- | | |
|------------------|--------------|
| 1 至聖所 | 15 大寝室への階段 |
| 2 死者の出口 | 16 談話室 |
| 3 修道士の内陣 | 17 修道士室 |
| 4 病者用長椅子 | 18 修練士室 |
| 5 内陣格子 | 19 修道士の手洗い |
| 6 助修士の内陣 | 20 暖房室 |
| 7 入口柱廊 | 21 噴泉室 |
| 8 大寝室への階段 | 22 修道士の大食堂 |
| 9 聖具室 | 23 講読壇 |
| 10 書庫 | 24 厨房 |
| 11 読書および洗足礼用の長椅子 | 25 貯蔵庫担当者談話室 |
| 12 修道士の入口 | 26 助修士通路 |
| 13 助修士の入口 | 27 貯蔵庫 |
| 14 集会室 | 28 助修士の大食堂 |
| | 29 助修士の手洗い |

図版出典

W.ブラウンフェルス『西欧の修道院建築』（八坂書房、2009年）

修道院

紀元3世紀末から4世紀初頭にかけて、現実の世界に背を向け、エジプトの砂漠地帯に旅立った人々がいた。彼らがそこではじめた生活が、修道院の起源であると言われる。

中世にかけて大きな発展をとげた修道院において、彼らは農業をベースとした自給自足の集団生活を営んだばかりか、水流を利用した水洗便所を設け、のみならず水車を利用したエネルギーをつくりだし、ときには鉄の生産までおこなった。

「知の領域」は、11-12世紀にかけて大学が誕生するまでは、修道院が独占していた。さらに分院の経営は本院に経済的な富をもたらし、12世紀に繁栄をきわめたクリュニー大修道院長は時のフランス国王よりも多大な資産を有していたという。

現実世界に背を向けて別世界をつくりだしたはずの彼らは、現実世界を飲み込まんとする巨大勢力をつくりだしたのだった。修道院は家であり、共同体であり、都市であった。

エスキス：

毎週火曜日13:30から加藤研（306）にて

履修条件：

学部生のみ

課題趣旨

本課題は、宗教施設の設計を求めるものではない。既知の世界と異なる理想を求めて人々が作りだした新たな世界像として修道院をとらえたとき、そこには思いもよらなかった豊かな世界がひろがってくるだろう。宗教は人々があつまるひとつの理由だった。しかし修道院から「宗教」という枠組みを外したとき、近代的な「理想都市」よりもはるかに濃密な「新世界」が見えてくるはずである。

スタジオの前半（中間講評まで）は、主として修道院のリサーチを行う。日本語文献の抄読にとどまらず、外国語文献をふんだんに用いた研究レベルのリサーチを期待したい。そのリサーチを踏まえたうえで展開させる設計の段階では、敷地も用途も予算も指定しない。各自、現代に相応しい新たな世界を設計して見せてほしい。